



モンテ・クリスト伯

I

アレクサンドル・デュマ
山内義雄 譯

新版世界文學全集

3

新潮社 版

新版世界文学全集 3

モンテ・クリスト伯 I

昭和三十三年三月三十日 発行
昭和三十三年六月十日 二刷

定価 参百五拾円

地方
売価 参百六拾円

訳者 山内義雄

発行者 佐藤義夫
東京都新宿区矢来町七一

発行者 株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一

電話東京 〇七一一〜九番
振替東京 八〇八番

乱丁・落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

印刷 扶桑印刷株式会社
製本 神田 加藤製本所

解 説

『巖窟王』の名によってわが国に紹介されて以来、この小説ほどひろく読まれ、また絶えず読者を新たにできた作品は、けだしたぐい稀であると言えましょう。そして、この作品とその作者と、さらにその作者と時代とを併せ考えると、そこに伝奇小説としてこの作品のもつ永遠の若さの理由が十二分に酌みとられるように思います。

アレクサンドル・デュマは一八〇二年七月二十四日、すなわち革命暦の熱月五日、フランス、エーヌ県ヴィレル・コトレで生まれました。こゝは、フランス北部にある小都会で、パリからは東北にあたり、第一次ヨーロッパ大戦のみぎり、壮麗な伽藍がドイツ軍の砲撃によって無残にも破壊されたことで知られているランスの町の真西にあたっています。

一八〇二年と言えば、ナポレオンが第一執政官の地位につき、まずオーストリアを膺懲しようとして、軍を率いてアルプスの嶮を越え、敵をマレンゴに破って後二年にあたります。すなわち、デュマが呱呱の声をあげた前後にわたって、ヨーロッパはナポレオンの前に震駭し、フランス全土をあげて、こぞって戦勝の誇りに熱狂していた時代と言えましょう。かくてナポレオンは、一八〇四年には帝位につき、一八〇五年には有名なアウステルリッツの三帝会戦で大捷し、ヨーロッパ制覇の快をほしきままにしたと思つたのも束の間、運命は、十年の後には、ナポレオンの退位と、それにつづくエルバ島への流離を、さらに一八一五年には、セント・ヘレナ島での痛ましい晩年とを準備していたというわけでした。

物ごころづくとともに、絶えずナポレオンの偉業を聞かされていたデュマにとつて、ナポレオンの没落後ルイ十八世の治世となり、フランス全土が偷安無為の政情の中に低迷しているのをながめたと、それはなんとも堪

えがたいものがあつたにちがいありませんでした。否、それは単にデュマだけにとどまらず、七月革命、つづいてストラスブール・ブローニュで企てられたルイ・ナポレオンの革命運動などにしても、すべてこれ、現在の政情に倦み、かつての光榮の日をなつかしく思い起こすとともに、ようやく擡頭期にある近世資本主義の脈搏を敏感に感じはじめていたフランス国民全体の、きわめて自然な考え方の發露だったと言えるでしょう。

デュマの父は、サン・ドマングのジュレミー島の生れで陸軍中将、母はエリザベート・ラブーレ。父方の祖父は、アントワヌ・アレクサンドル・ダヴィッド・ド・ラ・バイユトリーといつて、砲兵監をつとめていました。この人は、一七八六年に世を去りましたが、その妻のマリー・セセット・デュマは黒人の娘でした。こうしたわけで、わがアレクサンドル・デュマは、まぎれもなく半ば黒人の血を受けていたのです。こうした彼の血統と、一方にはフランス大革命の後を受けてのナポレオンの覇業の時代と、この二つこそはデュマの生成の秘密を解くにあたつての重要な鍵であると言えましょう。

デュマの父の中将については、後年デュマの書いた『回想記』にその風貌があますところなく描きだされていますが、容貌魁偉、身のたけ拔群、軍隊内では「黒い悪魔」^{ディابل・ノワール}というあだ名で知られ、とりわけ膂力のすぐれていた点について、かずかずの逸話がつたえられています。ある日の夕暮れ、折から野営をしていた兵卒たちは、食後のつれづれに、めいめい力わざを競ひあつていました。一人の兵士は、銃を一挺取りだし、その銃口に指をさしこみ、指一本の力で銃を軽々と持ちあげてみせました。たまたまそこへ来かつたのがデュマ將軍で、彼は、自分もひとつ仲間入りをさせてもらおうと言うが早いか、銃を四挺持つて来させ、一本の指に一挺ずつ、つまり四挺の銃を四つの指にはめ、それを楽々と持ちあげて見せて、並居る將兵を驚嘆させたということでもあります。あるいはまた、馬を両股ではさんだまま、家の鴨居にぶらさがつてみせたこともあるとか。これらはデュマが、かつて父の配下で軍医をしていたフュリスから聞いた話として伝えられているところで、いずれにしても、昔シャルルマンニュ大帝を取りまく勇士たちの有名な法螺くらべを思わせるような話であると言えましょう。ナポ

レオン麾下の勇将として聞えた父にまつわるこうした逸話、それが幼ないデュマに、どれほど偉大な英雄としての父の姿を思い描かせたことでしょう。

だが、そうした父も、一八〇六年、四十歳で病没しました。ところが、將軍の晩年二カ年間の俸給は未払のままであり、しかも長期にわたる療養生活のため、わずかばかりの貯えも残り少なくなっていたため、將軍と親交のあったブリュース、オージュロー、ミュラーなどは、遺族の窮境をナポレオンに訴えたのですが、將軍がかつて共和黨員だったという事実に釈然たらざるものがあつたナポレオンは、そうした取りなしに耳を傾けようとしませんでした。いきおい、あとに残された母は、学校の寄宿舎に入れてあつた姉娘と、当時ようやく四歳になつたばかりのデュマの二児を抱えて、窮乏のうちに生計を立てていかなければなりませんでした。

だが、こうした生活上の窮迫にもかかわらず、ヴィレル・コトレを中心としてのデュマの少年時代には、かなりのびのびとしたものがあつたようでした。その地方の森林ガスト・オレステ監守たちにかわいがられたデュマは、彼らのあとについて好んで森を歩きまわるのを日課にしていました。父から受けついだ健康な体と、雄大な森林を背景とした大らかな生活とが、発育ざかりの彼の心をどれほどゆたかな空想でみたし、どれほど大きな自信でふくれあがらせたかは想像するにたくありません。こうしているうちに、彼は何ものをも恐れない人間になっていました。そして歴史の一ページさえ知らなかった彼にして、後年歴史文学に突き進もうという氣持を起こしたというのも、これまた、そうした生活のうちに体得された逞しい自信に胚胎したものと言えるでしょう。大自然の中に育まれた若き日のデュマのこうした生活こそは、生れつき頑健だった彼に、さらに遺憾のない鍛錬をあたえたと同時に、他日、彼の作品に見られる驚くべき想像力を準備するため、きわめて大きな糧となつたことは疑いを容れません。

ところで、あくまで自信に満ちていたデュマではありませんでしたが、音楽だけは不得手だったと言われています。これは、デュマの作品を考えるにあたって興味のある点で、彼の文体が、ロマン派風の抒情調を拒絶し、どこま

でも事実の推移を追っての直截な描写に終始し、他方、いたずらな文飾に心をわずらわすことのなかったことを思いますと、大衆を把握する上から言つて、むしろ彼の文学における大きな長所となつてゐる感があります。

少年期から青年期にかけて、彼は折あらば森に出かけ、木株に腰をおろしては、森林監守たちの口から、大ナポレオン時代の戦物語をきくのを無上の楽しみにしていました。森林監守たちの多くは、すべて戦場経験の古つたものでした。若きデュマにとって、戦場での手柄話のかずかずは、町の司祭のもとの勉強よりずっと心を引きつけるものであったことは言うまでもありません。同時に、そのころ彼の読みふけていたのが、あるいは『千夜一夜物語』であり、『ロビンソン・クルーソー』であり、神話であり、聖書であつたことを思いますと、若き日の彼の心は、きわめてすなおに、後年の大デュマへの生成の途をたどりつつあつたものと言ふことができましよう。

おなじくそのころ、彼は、アメデ・ドゥ・ラ・ボンスとよばれる土官から、はじめてゲーテの『ウェルテルの悲しみ』の存在を教えられました。そして、そのころの青年の誰しもとおなじように、彼もまたこの作品を耽読しました。そして、おほろげではありませんが、はじめて文学への嗜欲を掻きたてられたと述べています。同時に、さらに彼をして後年の大デュマへと駆りたてた大きな動因としては、彼がたまたまシェークスピアの作品に触れた事実をあげなければなりません。彼は、パリ、コンセルヴァトワールの一行が、つい近所のソワソンの町にきて上演した『ハムレット』を見たのでした。このときはじめて接したシェークスピアの魅力は、まさに作家としてのデュマに決定的な影響をあたえました。『モンテ・クリスト伯』の中においても、シェークスピアから受けたと思われる思想なり性格なりは、到るところに指摘されます。そのきわめて明らかな一例としては、読者諸君は、ヴィルフォール夫人の原型が、マクベス夫人そのものにはかならないことをお氣がおつきになるでしょう。さらに作家としてのデュマの発足に拍車をかけたものは、子爵アドルフ・ドゥ・ルーヴァンとの交遊でした。アドルフは、デュマとはほとんど同年配の青年で、スエーデン貴族の家に生れ、国を追われてフランスに移り住んでいたのですが、たまたまコトレ附近のヴィレル・エロンの別荘に滞在中デュマと知りあいました。パリでも一

かどの通人として、芝居道にも顔がひろく、方々の劇場にも自由に出入りしていたアドルフの話は、大いにデュマの心をそり立てました。夏がすぎ、パリへ帰ってからのアドルフからは、つぎつぎに本が送り届けられました。その中の一冊『アイヴァンホー』を手にしたとき、十八歳のデュマはとりわけ心を動かされ、卒然として抑えがたい創作慾の湧き起こるのを感じたと述べています。そして、筆を呵して一気に三巻物のメロドラマを書きあげました。これが、彼としての最初の作品というわけでした。

一八二三年、二十一歳の彼は、折からクレピエの公証人役場の書記をつとめていたのですが、劇壇のことを思うにつけ、生来の自負心も手伝って、なんとしてもパリへ出たいと思い、一人の友人とさそいあつて、一しょに徒歩でパリへ出かけ、当時噴々たる名声につつまれていた名優タルマの楽屋を訪れました。ところが、顔をつくっていたタルマは、この若い劇作家の来意をきくと、その場に居あわせた人々の前もかまわず「父と子とシェークスピアの名において申しますが、あなたはたしかに偉大な劇作家でおいでですな。」と言い、さらにおつかぶせて「田舎にお帰りになるがよろしい。そして、もっと勉強なさるんですな。」と、言つたのでした。思わずカッとなったデュマは、そのままパリを引きあげましたが、いったん思いさだめた牢固とした決心は、しばらくして、彼をふたたびパリへ向かわせました。

彼は、父の旧知だった一人の將軍の口ききで、オルレアン侯の秘書課に書記としての職を得ました。ところが何たる偶然か、その秘書課の窓というのが、ちょうどコメディ・フランセーズ座へ向かつていました。これは、デュマにとって、はげしすぎるほどの刺激でした。彼は、改めて、劇作家となるため、まだまだ学ばなければならぬことを反省し、仕事のかたわら、その生来の精力のおもむくままに、古今東西、手に入るかぎりの名篇大作を渉獵し、古きはアイスキュロス、ソフォクレスから、下つてはコルネイユ、シェークスピア、モリエールは言うに及ばず、カルデロン、ゲーテ、シッレルにいたるまで、文字通り寝食を忘れて読みふけたのでした。

こうした熱心な勉強の結果、一八二五年、彼は、ルソー、ルーヴェンの二人と、三者合作の形式で、ヴォードヴ

イル『狼と愛』を書きあげました。そして、これが幸運にもアンビギュ・コミック座に上演されたのに気をよくして、越えて一八二六年には、『婚礼と埋葬』を書きあげ、ポルト・サン・マルタン座で上演されました。これまた、ラサンニユとの合作によったものでしたが、デュマはこうして、着々劇壇への乗り出しに成功したというわけでした。

こうしたあいだに、彼は、フランス劇壇を席捲する最初の烽火となった第一作『アンリ三世とその宮廷』五幕を用意しました。そして、一八二九年二月、この作品が、あこがれの檜舞台だったテアトル・フランセに上演されるやいなや、まさに破れんばかりの喝采を博しました。つづいて一八三〇年には『クリスティーヌ』がオデオン座で脚光を浴び、これまた『アンリ三世とその宮廷』にくらべて優るとも劣らぬ成功をおさめ、ここに劇作家としてのデュマの地位は確立し、その名声をウィクトル・ユゴーと争うほどになったのでした。

とは言え、まだそのころは、デュマとユゴーと、この二人のあいだには、競争意識に基づく不和といったようなものは見られませんでした。折柄ユゴーの戯曲『マリヨン・ドロム』が当局の忌諱に触れたとき、ユゴーは、特にデュマをわが家に招き、これを朗読して聞かせたところ、デュマが口をきわめて絶賛したといった佳話が伝えられているとともに、一方、ユゴーも、デュマの『クリスティーヌ』初演の日に、その中の詩句に妥当を欠くものがあつたため観客に受けなかったことを残念に思い、アルフレッド・ドゥ・ヴィニーと一しょに、進んでそれを訂正してやったというような美談も伝えられています。

七月革命（一八三〇年）が勃発した当時、デュマはすでにオルレアン侯のもとを辞して、もっぱら文学生活にはいつていました。そして『アントニー』『ネールの塔』『キーン』を次々に上演した彼は、まさに当時の劇壇を風靡しつついていたと言っているでしょう。

ところでデュマには、その驚くべき精力を、劇作以外に発揮する好機会が訪れました。一八三三年、たまたまスイスに旅行中、『^{ユミグレ}命貴族の子』の上演がポルト・サン・マルタン座で失敗したという報に接した彼は、フラン

ス革命、ナポレオンの覇業の後をうけてフランスに湧き起こっていた歴史的嗜好のことに思い到り、しかも、従来の歴史小説が、ともすれば考証の正確さに恋々たるあまり読者の倦怠をさそう以外になかったことを考えて、何よりもまず、情熱と行動の上に立ち、ひろく民衆の心を撃つような歴史を書くことを思いついたのでした。ここにもまた、デュマの着眼の鋭さをうかがうことができましょう。

一八四四年、デュマが、歴史小説の第一声として放った『三銃士』は、まさに空前の熱狂をもって迎えられました。そして、それに引きつづく『二十年後』『モンテ・クリスト伯』『ブラジユロンヌ子爵』など数百篇をかぞえる彼の小説作品は、文字通り民衆の心をしっかりとつかんで、ここにフランス国民文学としての大デュマ山脈をきずきあげたというわけでした。もとより、人力以上を思わせるこうした大仕事の裏には、彼自身の言葉を借りて言えば「ナポレオンにおける將軍たち」を思わせるような多くのすぐれた協力者たちがいました。とりわけ、一八三九年にはじまるデュマとマケとの結びつきは、大デュマ出現の重要な契機をなしたものとと言えるでしょう。ただ、『モンテ・クリスト伯』のためには、デュマは、その着想から執筆にいたるまで、ほとんど独力によって為したと言われています。主人公エドモン・ダンテスに寄せるデュマの愛着が、彼をして、一代の傑作を書きあげる意気込みをもってこの作品の筆をとらせたと言われましょう。

無辜の罪を負わされてシャトー・ディフの牢獄につながられること前後十四年、世を呪い人を恨む悶々の情に苦しんでいた主人公エドモン・ダンテスは、一たび牢を逃れて混濁の社会の中に立ちもどつてくるやいなや、冷然氷を割って生れ出た人のように、その明敏な理性と意志とを青白い額にたたえ、あらゆる情熱、あらゆる感激の嵐のなかを突きぬけて、着々と復讐の歩をすすめ、尋常人の目をもってしては見とおすことのできない大きな意志を帯して、あらゆる混濁のなかに一条の正義の大道をつらぬきます。まさにこれ、一種の神性を具えた人物とも言えましょうか。そこにしめされている理想なり、全巻にわたる雄大な構想なり、それこそは、生れながらにして驚くべき精力と異常な天才とをめぐまれたデュマが、その四十年代の旺盛な制作慾をこの一卷に凝縮して

世に問おうとしたものであり、これは単なる復讐小説の類からはるかに遠く、まさにこれ、世に正義を布かんとする一片耿々の志の上に立つたものと言えましよう。

こうして、ほとんど人間業と思われないほどの労作をつぎつぎにしていたデュマではありましたが、彼は、その放胆な浪費癖から、絶えず財政上の窮乏に追い立てられ、作品を連載していた新聞社からはいつも文債に責め立てられ、その結果訴訟問題さえ起こしたことがしばしばでした。しかもデュマは、文筆によって得た莫大な財を傾けつくして、サン・ジェルマンの丘上に宏壮な「モンテ・クリストの別荘」を建てました。けだし、『モンテ・クリスト伯』こそは、彼として夢寐にも忘れることのできなかつた高邁な理想の具象化であり、そして、その名にちなんだ「モンテ・クリストの別荘」こそは、彼が、老いざる主人公エドモン・ダンテスとともに、天際から吹きおろす無辺の風を身に浴びながら、いつも新らしい地平をながめたいと思つての造営だったと言えるでしょう。

老ゆるを知らないおもむきのあつたデュマの運命も、一八四八年、二月革命の勃発を機としてようやく下り坂に向かい、一八五二年、無二の協力者だったマケと袂をわかつてからはさらに衰えをしめはじめました。多額の負債に苦しめられた彼は、一時パリを立ちのくことを余儀なくされ、しばらくベルギーに移り住んでいましたが、ふたたびパリにもどれるようになるやいなや、彼はたちまちかつての不撓不屈の意気がよみがえりでもしたかのように、個人雑誌『モンテ・クリスト』の刊行を企てました。ここにもまた、運命の坂を下ろうとしながら、なおも見えざるダンテスの夢を追いつめていた彼の気持がうかがえるものとは言えますまいか。

彼は、晩年を、娘と、『樺姫』の作者である息子のアレクサンドル・デュマ・フィスのやさしい心づくしにまもられてすごしました。そして、一八七〇年十二月六日、折から普仏戦争も終りに近く、プロシヤ軍によつて打ちだされる砲声が殷々としてパリの空にとどろきわたっていたころ、ディエップに近いビュイの別荘で最後の息を引きとりました。そして、臨終にのぞんで、彼は、息子をかえりみながら「世間では、おれのことを浪費家だっ

たと言っている。ところで、おれは、パリに出てきたとき、二十フランの金しか持っていなかった。」と、言いながら、手近な煖炉棚の上に載せてあった最後の一枚の金貨のほうへ目を向けながら、「そして、それ、その金貨は、あそこにちゃんととってあるのだ。」と言ったと伝えられています。

デュマが死んでからおよそ九十年、その作品は絶えず新たな読者によって読みつがれてきましたが、彼をもつて単なる興味中心の大衆作家として取りあつかってきた在来の見方にたいし、ジャン・コクトーが「彼こそは真実以上の真実を描いた巨匠」であると言ひ、ギヨーム・アポリネールが「驚嘆すべきデュマ……」と評した言葉とならんで、近來フランスにおいてはデュマ研究の名著がつぎつぎと公けにされ、近くはアンドレ・モロワによつて『デュマ家三銃士』の名の下に、デュマ將軍、デュマ、それに『椿姫』の作家たるデュマ・フィス三代にわたる研究が刊行されるなど、デュマ再認識の傾向きわめていちじるしいものがあるように思ひます。

山内義雄

目次

一	マルセイユ——到着	五
二	父と子	三
三	カタロニヤ村の人々	三
四	陰謀	四
五	婚約披露	四
六	検事代理	五
七	訊問	五
八	インフートの城	六
九	許婚式の夕	六
一〇	テニールリー宮殿の書斎	六
一一	コルシカの鬼	七
一二	父と子	七
一三	サンジ政治	八
一四	怒れる囚人と狂える囚人	八
一五	三十四号と二十七号	九
一六	イタリーの学者	九
一七	司祭の室	一〇
一八	宝	一〇

一九	第三の発作	一九
二〇	シャトー・ディフの墓場	二〇
二一	ティブラン島	二六
二二	密輸入者	三七
二三	モンテ・クリスト島	三四
二四	眩耀	三三
二五	見知らぬ男	四〇
二六	ポン・デュ・ガールの旅籠屋	四五
二七	物語	三七
二八	監獄の記録	三七
二九	モレル商会	三七
三〇	九月五日	三九
三一	イタリー——船乗りシンドバッド	三三
三二	めざめ	三六
三三	ローマの山賊	三三
三四	出現	三六
三五	撲殺の刑	三六
三六	ローマの謝肉祭	三九
三七	聖セバスチヤンの ^{カタコンベ} 竈窟	四三
三八	約束	四元

モンテ・クリスト伯
I

